



リオデジャネイロオリンピックから考える

校長 西尾 晃明

リオ五輪については多くの人たちが様々な視点で考えを述べています。そんな中から2つ紹介します。

『柔道女子63kg級の田代未来選手だ。彼女は3位決定戦で負け、メダルに手が届かなかった。彼女は試合直後、こう言った。

「本当にここまでたくさんの方々が支えてくださって、背中を押してくれたにもかかわらず、こういう結果になってしまったことを申し訳なく思います」

—本当にわずかの差でした—

「いえ、勝たなきゃ意味がないと思っています」

—谷本歩実コーチと4年後に向けて力強く歩んでください—

「わかりました」

勝利だけを目指して4年間も戦ってきたのだ。あの敗北直後の時間は彼女が4年間でもっとも辛く苦しいときであったはずだ。にもかかわらず、彼女は現実に向き合いカメラの前に立って正直に自分の気持ちを話し、きちんと感謝も述べた。私たちはみんな失敗や挫折を経験する。情けなくて恥ずかしくて、だれにも会いたくない。ときには言い訳すら考えてしまう。そんな経験はだれにでもあるだろう。五輪アスリートたちの真の凄さは成功し続けてきたからではない。私たちと同じように失敗や挫折をいくつも重ねながら、そこから這い上がり、それでまた大一番で負けても、しっかり現実を直視して歩き出す。そういう所が本当に立派であり、凄いのだ』

長谷川幸洋「ニュースの原稿」現代ビジネス8月12日版より(抜粋)

『閉会式の後半に、舞台中央で熱唱する地元の子供たちの姿が印象に残った。互いに肌の色などは違うのだが、みんなが「リオ・ブラジルの子ども」だった。閉会式の挨拶に立ったバハ会長は「今回のオリンピックは多様性が代え難いものであることを示し、祝福する機会を与えてくれた」と振り返った。

オリンピックの「平和の祭典」と称される「平和」を「多様性の受容」と置き換えることができる。「平和」と「戦争」は相反する。「戦争」は簡単に言うと「違い」の受け入れの欠落によって生じる。戦争とは「殺すか殺されるか」である。「殺す」とは人権侵害の極悪な形である。殺すか殺されるかの次元に追い込まれ生きなければならなくなった者に、その真逆の感情である「人権」の話を理解することは到底困難である。

開会式で「難民チーム」が開催国のブラジルチームの一つ前に入場した際は、会場の人々はスタンディングオベーションの盛大な歓迎で迎えられた。独自の国旗がない「難民」をオリンピックの五輪の旗をもって包み込んだ。この出来事は戦争や人権侵害と対立軸にオリンピックがあることを強く印象づけた』

にゃんた「ハフポストブログ」8月29日版より(抜粋)

この2人の文章をとっていてもオリンピックにはいろいろな見方や意見があると思います。

2020東京五輪に向けて自分はどう関わっていくのか。この文章もきっかけに考えてみてください。

今後の予定

9/22	PTA講演会	9/30	生徒会役員選挙
9/23	中間考査	10/2	開校記念日
9/29	古典芸能鑑賞教室	10/7	校外学習2年
	1年		

六中生の心

思いやりの心

やさしい心

感謝の心